

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4392900041		
法人名	株式会社 翔栄		
事業所名	グループホームと鹿島		
所在地	熊本県八代郡氷川町鹿野1301番地2		
自己評価作成日	令和2年10月5日	評価結果市町村受理日	令和3年1月29日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokennsaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなろ福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	令和2年10月26日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

共用型デイを併設しており、合計12名の入居・利用者と毎日を笑顔で生活しています。入居者の中には、大声を出したりホール内を車椅子でぐるぐる回る方もいらっしゃいますが、他入居者が自然と手を差し伸べたり職員を手伝ってくれたりと家族のような温かい光景が良く見られています。同敷地内にある訪問看護ステーションの週1回の健康チェックと協力医院の月1回の訪問診療で一人ひとりに合わせた健康管理が以前に増して出来てきていると思います。職員も若い方が増え、より明るく楽しい雰囲気になっており職員間でも意見が活発に出るようになっていきます。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

本年は事業所にとって新たなユニットに、新たな入居者、職員を迎えた記念すべき年となり、職員はコロナ禍にあっても知恵を出し合い出来る事で入居者の日々を支えるべく最大の努力をしている。併設する共用型デイにおいても、地域に住む認知症高齢者の拠り所として管理者をはじめ職員は、真摯に課題と向き合い他事業所の共用型デイの開設に貢献できればと考えている。代表者が地域の中に定住したことで人々との交流が前進し、さらに職員が運営推進会議の案内状を参加者に届けて会話の機会とすることでホームへの信頼にもつながっている。道行く人々は新設した花壇や日光干された布団の数を目にしながらかれるようで、嬉しい言葉ももらっている。施設長自らもケアに入り職員への思いや、感染症に対する心構えなどを文章にするなど全員で育むホームであることを伝えており、今後の運営が更に期待されることである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが ○ 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が ○ 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が ○ 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が ○ 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない			

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	開設時に作成した介護理念であり、見直しもしたがそのまま継続している。若い職員が増えた事もあり再度見直し理念の実践に努めたい。	平成26年2月の開設以来、まる7年を迎え、2月に新たなユニットをスタートしている。共用型デイの併設にも着手したホームでは賑やかな1年を迎えている。戸建て形式のユニットは互いをお隣さんとして交流し“すべての出会いに感謝し、こころ寄り添う介護”の実践に向け、入職した職員とともに心新たに理念に向き合っている。	開設時からの理念を現在もケアの指針として大切に育てており、増床を機に今後は変更の有無に限らず、年度末などに見なおしの機会を持つ事が期待される。また、ユニットごとに職員が取り組みやすい年目標などを検討するとよいと思われる。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	社長や施設長が地域の一員として交流している他にデイ管理者が地域のサロンに顔を出したりしている。	代表者は自らも地域の一員として普段から近隣の人々と交流し、グランドゴルフなどの行事に参加している。新しいホームの内覧会には地域からも足を運んでもらい、道行く人々の癒しになればと花壇を整備して季節の花を楽しんでもらう等工夫している。また、ホームは災害時の避難所として地域へ開放するなど地域貢献にも寄与している。	コロナ禍の中でも職員のアイデアで室内活動を充実し、近隣の畑の中を散歩したりドライブに出かける等、直接的な地域との関わりはなかったものの、出来る事に対応しており、収束後の交流が期待される。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議等で認知症の人の理解や支援を伝えているが、地域全体までは出ていない。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	地域の民生委員の方と情報を共有するなどの取り組みをしている。会議では報告・話し合いのほかに近所やご自宅での困っている事も聞き出している。	年度当初会議が開催できなかったことで、7月を初回として開催している。行政や包括、地域代表者の協力が多数得られており、グループホームや共用型デイの利用者家族も同席している。入居者の日々の暮らしぶりを紹介しながら職員の異動や事故、ヒヤリハットについて報告を行い、身体拘束適正化検討委員会を設置して、帰宅願望のある利用者に対する対応について、出来る事に集中してもらい見守る中で、少しずつ安定された事例などを紹介している。	職員は会議の案内状を参加者に直接届け、ホームや地域の話に触れながら友好的な関係作りに努力している。今後も引き続き地域との連携に努められることが期待される。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議に参加頂き、取組みや考えを積極的に伝え、協力関係を築くようにしている。	運営推進会議には行政や包括から担当者が参加しており、ホームの現状を明らかにすることで適切な意見やアドバイスを受けている。新ユニット増設への協力や地域での存在が徐々に人々に浸透しており、行政との関係も良好なものとなっている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	職員同士で勉強会、アンケートを用い正しく理解し、身に付けていく様努力している。	職員は身体拘束の施設内研修で、拘束がもたらす身体的、精神的、社会的な弊害について共有の機会を持っている。「どうすれば身体拘束をしないですむか？」「どうすればなくなるのか？」など、自分たちでもハッキリと回答を出せない問題だからこそ、入居者が見ている景色や言葉にならない思いを想像し、同じ目線に立って向かい合う事だとしている。運営推進会議でも委員会を設置することで、ホームの透明性を図り、参加者の意見を運営に反映させている。	入居者の中には人感センサーを使用する方がおられ、使用開始にあたり家族への説明と承諾を得ているが、継続して使う場合についてもプランなどでの説明を望みたい。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	外部の勉強会参加や職員間の勉強会を開いたり、1人で職員が無理を溜める事がないように努める。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	制度の理解はある程度あるも、支援の機会がなかった。さらに、知識と理解に努める。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又はや改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約に関する事項は施設長と管理者で行っており、十分な説明を行い理解・納得を得ている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	利用者については、いつでも話を聞けるまた個人に話掛けれる様気をつけている。家族に関しては月に一度面会し、会う機会を設けている。	本年度はコロナの影響により、家族との電話やメールでのやり取りが増えている。面会も窓越し面会や遠方の家族とのリモート面会に切り替え、入居者と家族の関係性が薄れないように配慮している。利用料は現在も家族が持参されており、職員は遠慮なく意見や要望をもらうよう投げかけている。建設中の新ホームを家族がドローン撮影したり、近くの川の増水が一目でわかるQRコードを準備してもらう等嬉しい協力が得られている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に一度カンファレンスを開催し、意見や考えを聞くようにしている。そこで出た意見を検討し運営に反映している。	職員のアイデアにより外出の出来ない時だからこそ、入居者との時間を作り、運動会や中庭でのバーベキューが実現している。毎月のケアカンファレンスと必要な時はその都度話し合い、入居者やホームの現状を共有して、ホーム運営に全員が関わるよう意見を出しやすい環境を整えている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	賞与前に自己評価を出してもらい反映している。職場の環境や条件についても高い水準で考えてある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	勤務として学ばせてもらったり、研修を受ける環境を作っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム連絡協議会や研修に行くことで他事業所との交流の機会がある。現在はコロナの影響でできていない。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	本人からの聞き取りを始め、関わる方から出来るだけ情報を得よう心掛けている。共用型デイ利用からの入居など本人も家族も顔なじみの状態から支援を始めることが出来る。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	サービス導入前から担当会議を開き話を聞くなど事前の打ち合わせが出来るようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人や家族が抱える不安や思いを受け止めると共に、気づいていない問題がないかを考え多方面から支えられるよう努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	施設で過ごす家族の一員として共に悩んで一緒に笑い楽しんで日々を共有できる様に心がけている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族と本人が離れて生活しても互いが判り、見えるように双方とのコミュニケーションを大事にすることを心がけている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	馴染みの店で髪をカットしたり、リモートで顔を見せたりしている。施設内に夫婦・姉弟・友達等入居しておられる。	入居者がこれまで出かけていた地域の商店や美容店などとの関係継続に努めている。ホームの中には夫婦、姉弟などの家族で入居されることもあり、職員は互いの関係性に配慮し、間を取りもつよう努力している。入居者には職員との関わりが馴染みとなっており、離職の少ない職場環境は安心するところとなっている。天気の良い日のフェンスでの布団干しも馴染みの光景となり、近隣者の「よ～干しなるね～！」の応援の声も聞かれている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	気が合う方、そうでない方を把握しよい関係が保てるように心がける。また、個人が一人になれる空間も心がける。時には職員が入り関係を築けるよう心がける。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	民生委員の方に様子を聞いたり、相談に乗れる関係を保ち、必要に応じて話を聞けるように心がけている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	家族の夫婦共に暮らせたらとの希望や布団が良いとの希望、STやPTを入れる・パーマをかけに行く等、希望に応じている。	職員は入居者との普段の関わりからしたい事、行きたい所、食べたいものなど選択肢を投げながら思いを引き出している。カンファレンスには時には言語聴覚士や理学療法士も入り、専門的な立場から意見を聞き、支援に反映させるなど入居者の思いに寄り添うよう努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	主に家族からそれぞれの生活歴を聞いている。月一度の面会時にこちらから生活を話すことによってそういえば・・と言う話を引き出している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	スタッフ間で一人一人について話し合う機会を月1回のカンファレンスのほかにも日々話し現状把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	月に一度カンファレンスを開催し、意見や考えを担当受け持ちを中心に聞くようにしている。そこで出た意見を検討し課題を上げ介護計画に反映している。	本人・家族の意向をもとに、ケアカンファレンスであがった担当者の意見や気づきを吸い上げ、プランに繋いでいる。3か月ごとの評価で課題を見極め、入浴日を週2回から2~3回にするなど現状に沿ったものとしながら、入居者自身の残存機能を活かし、言葉かけ一つでトイレでの立位が取れる方など、継続した支援ができる内容をプランニングしている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	記録の研修をしたり、記録の様式を変えたりして出来るだけ無駄を省き大事な事を記録していくように指導しているが、全員に浸透はしていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	デイの緊急ショートを受け付けたり、家族の用途に合わせて夕食まで提供したり柔軟な対応に心がけている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	初詣や敬老会等計画をしたイベントのほか地域内での散歩・地域の文化祭参加等地域にも関わりを持てるよう支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	現在、5カ所の医療機関に往診を頼んでいる。家族の希望も反映させている。看護師を中心に情報の交換を心がけている。	入居時にかかりつけ医の確認を行い、希望に沿った適切な医療支援が継続できるよう支援している。現在、月1～2回の往診と、週1回の訪問看護支援、専門医などへの受診を家族やホームで対応している。かかりつけ医との連携や日頃の健康管理は看護職員を中心に、異変があれば早めの受診や指示を仰いでいる。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日々の気づきを看護師と共有できる様にしている。訪問看護とも相談できる環境を作るよう心がけている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は出来るだけ、訪問し病院関係者と交流を持ち本人を知ってもらうよう心がける。その際、相談員や医師にも出来る限り早期に退院できるように相談している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	かかりつけ医及び家族とよく話し合い、事業所で出来ることを十分に話し合い説明し方針を共有している。また、職員間でもよく話し合いそれに向けて努力している。	入居時にホームの方針を家族へ説明し、必要に応じて話し合いの機会が持たれている。看取り支援に入る前には、職員で本人・家族の思いに沿った支援などについて共有を図り、支援後は本人を偲びながら振り返りの機会を持っている。新ユニットは重度化へも対応できるよう機械浴の設置や、看取り中もベッドを移動し、他の入居者と共に時間を過ごせるような設計になっている。	看取り中も入浴や手指・足浴により清潔保持に努めており、この1年間で3名の方の看取りを支援している。家族からも「最後まできれいにしてもらった」と、感謝の言葉があがっている。今後も日頃の関わりを大切にした支援の継続に期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	救急搬送の具体的対応等カンファレンスにて施設内研修を行っている。個人差はあるものの皆が実践力を身につける様努力している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	火災については年2回の避難訓練を行っている。水害についても近くの川の水位等携帯から確認出来る様にしているが訓練は出来ていない。	今年度は5月に昼間を想定した避難訓練を実施しており、年内に夜間想定を予定している。ホームは河川に隣接しており、今後の訓練の必要性を認識している。地域河川の水位情報やライブ画像などのQRコードを家族が作成くださったことで、職員が直接確認に出る危険もなくなっている。	職員の中に2名の消防団員が在籍していることは心強く、今後の地域との連携がさらに深まっていくことを期待したい。災害備蓄はリストを作成し、新館で管理していることを、運営推進会議や家族などにも報告することで、安心や意見なども得られるものと思われる。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	声掛けは一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない様心がけており、スピーチロック等の研修も行っている。	一人ひとりのペースを尊重しながら、傾聴の姿勢で希望に沿った支援に努めている。呼称は苗字を基本としているが、反応や希望などから下の名前でも対応している。丁寧な言葉使いや対応に努める事を研修会などで周知を図っているが、業務優先や馴れ合いの言葉使いなど気になる場面も見られると、管理者は今後の課題を語っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日頃から注意深く観察するとともに、こちらから声をかけて話を聞くこともある。傾聴の際は、こちらからの一方的な声掛けにならぬよう気を付けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	1人ひとりのペースを大切にしているがスタッフの業務優先になっている場面も見える。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	季節やその人らしさを考えて声掛けできる様心がけている。よそいきの服も積極的に着るように努めている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	スタッフも同じ献立を食べており、より一人ひとりの好みに気づくことが出来る。また、可能な方は積極的に片付けを手伝ってくれている。	手作りにこだわった食事の提供は、ホームの特徴であり、施設長や調理専任者によって吟味された食材が購入されている。入居者は献立への希望をあげたり、茶わん洗いなど出来る事で食への関わりを持っており、食形態やトミ食も個々に応じて準備されている。職員も同じものを摂ることで、思いを共有し業務への活力にも繋がっている。コロナ感染症の心配から、外出などの取組は控えているが、秋には敬老祝いを兼ねて中庭で焼肉会を楽しんでいる。	今後も入居者にとって楽しい食事支援の継続に期待したい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	栄養士が献立を立てており、食事形態についても都度スタッフ間で話し合い情報共有している。水分は好みも考えこまめな水分補給を心がけている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	1人ひとりに合わせた口腔ケアに取り組んでいる。出来るだけ自分で出来るよう声掛けしている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	月1回のカンファレンスでの話し合いのほかにも都度スタッフ間で話し合い個別での対応を心がけている。	日中はトイレでの排泄を基本に支援している。リハビリパンツを使用される方が中心であるが、布パンツのみやパットの併用、オムツの使用など、個々に応じて排泄用品の検討や誘導を行っている。夜間のみポータブルトイレを使用される方もおられ、天候の良い日は日光干しにより清潔に管理している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	こまめに水分補給し野菜を多く献立に使用している。出来るだけ自然排便できる様子を付けているが、出ない方には下剤も使用している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	菖蒲湯やゆず湯は継続している。基本の曜日や時間帯は決めている。汚染時は都度、支援出来るようにしている。	入浴日や時間帯はある程度決定しているが、個々の体調や要望などに配慮し、週2～3回の支援を行っている。新ユニットには職員の見込みを取り入れ、機械浴を設置しており介護度の高い方も湯舟に浸かる事でき、職員も一人態勢での対応が可能となっている。入浴を楽しめるよう継続した季節湯の支援や、固形石鹸を使用した泡洗浄、入浴アメニティも多種揃えているが、好みのシャンプーを使用される方もおられる。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	出来るだけ自然に眠りにつけるよう日中運動をしたり昼寝が長ならないよう注意している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	看護が中心となり、理解するよう努力している。薬の変更時はスタッフで情報を共有し、症状の変化を各先生に情報提供出来るように心がけている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	脳トレや体操・歌などできる入居者が増えた分出来る事も増えている。ユーチューブを使い体操を行うことも出来るようになった。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	敷地内に畑もあり収穫してもらったり、花壇の花を見に行けるようにしたり散歩にも行っている。馴染みの美容室から迎えが来て髪を切られたりしている。	コロナ感染症への心配もあるが、庭先や近隣の散歩など可能な限り外気に触れる機会を持っている。地域の方の協力により作られた花壇は、散歩の時間をより豊かにしている。また、人込みを避けて初夏には、アジサイ見学にも出かけている。ウッドデッキを活用した日光浴や今年の桜の花見は、職員が持参した花を飾り、夜桜会を催すなど工夫をしながら外出に代わるイベントに取り組んでいる。	コロナの終息が見えない現状であり、今後も日光浴や散歩など出来得る外出支援の継続に期待したい。また、外出気分を味わえる旅に関するビデオやDVD視聴、写真集などの活用も有効かと思われる。取組に期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金を少し持っているとお心されたり、自動販売機に買いに行けるように小銭を持っている方がいる。基本的には事務所預かりにしている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯を自室に持っている方には家族から自由に連絡が入る様になっている。施設の携帯にもかかってくる取り次いでいる。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	常にきれいな状態を保てるように、全員で協力している。季節の花や展示物にも心がけている。	コロナ感染症への対応を含め、ホーム内は掃除や換気など衛生管理に努めている。双方のユニットは造りなども異なるが、入居者と一緒に作った壁面飾りや、敷地内に咲いた草花を飾るなど、職員が工夫しながら季節感のある空間を作っている。入居者は日中はリビングを中心に過ごしており、採光の良い旧館では歌声が響き、新館ではソファに腰かけ、外を眺めることを日課とされる方の姿なども見られた。	掲示板には直近のイベントの写真や入居者の作品、案内ポスターなどが掲示されている。今後は内容ごとに掲示することで、入居者や家族などにもわかりやすくなると思われる。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	和室があったりソファがあったり自由に好きな空間を過ごせる。テーブルの配置も時々検討している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族には、使い慣れた物や好みのものを持ってきてもらうようにしている。自分でつくられたものの飾り付けもスタッフで手伝っている。	本人にとって安心して過ごせる居室となるよう、馴染みの品の必要性などを伝えている。旧館には比較的家具類などの持ち込みも行われているが、新館では押入れが狭いこともあり、プラスチックの衣装ケースを準備される方が多い現状である。ホーム周辺は田畑という環境もあり、周辺への気遣いも少なく、天候の良い日は努めて寝具の日光干しにより気持ちの良い安眠に繋げている。	コロナ感染症のため家族の来訪も限られており、今後も家族に代わっての環境整備や現状報告、必要な品の連絡など連携に努めていかれることを期待したい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	出来るだけ自分の出来る事はやってもらえるように声掛けしています。		